

訳者の欠酸 春を夢見て……



東江一紀

翻訳学校からの帰り、最終に近い小田急線の車内で、乗降ドアの上にある小さな電光掲示板をぼうつと見ていたら、「八十歳の老人、病気の妻を殺害」というニュースが生酔いの頭に突き刺さった。

見出し程度の簡単な電光記事なので、詳しいことはわからないが、どうやら、このおじ

いさん、自分が入院することになったんで、寝たきりの妻をひとり残していくわけにもいかず、先にあの世へ送り込んだということのようです。

胸にずしんと響くニュースだ。この老人、病院のかわりに刑務所に入ることになるんでしょうか。それはたぶん情状で免れるだろう

けれど、そこまで覚悟しての犯行(?)だったのではないかという気がする。

妻に付き添える人間がいなくなる。自分だって、帰ってこられるかどうかわからない。病氣、どちらかの死、その後始末……などと考えると、とりあえず妻の死に水を取る作業を前倒しにして、あとは自分の病氣だけと向き合うという選択は、至極前向きで、合理的なものだったのではないか。

いや、もちろん、殺される奥さんのほうが納得していればの話ですが。

少なくとも、しかし、この老夫婦にはもう、「最後の心配」はなくなったわけである。

凛然としつつも、わたし、何か自分の将来の選択肢がひとつ増えたような、罰当たりな爽快感を味わいました。

獄中もしくは病床で残された歳月を過ごすことになるこの老人の頭のなかを、八十年の人生はどのように駆け巡るんでしょうねえ。

過去の栄光とか失意とか浮き沈みとかいうものは、そこまで来ると、ちららになっってしまうんじゃないかしら。

そういう人生最後の時間を、羽布団のなかでぬくぬくと過ごそうと、硬い寝床で冷えびえ肅々と過ごそうと、大差ないんじゃないかという気がしてきて(↑根拠なし)、それなんだか救われるのだ。

だけど、行きの電車でこのニュースを見た
ら、パニックに陥っていたかもしれない。

この日は、いつもより早起きして、朝から
エンジン全開、夕方出かけるほんの数分前ま
で、締切り過ぎた短編の翻訳に追われていた
ので、電車に駆け込んだ時点で、頭が過剰覚
醒状態にあり、案の定、不安神経症の発作に
襲われてしまったのだった。

発作といっても、主な症状は、本や雑誌の
活字を追えなくなるだけ。活字を見ていると、
動悸がしてきて、昏倒しそうな不安を覚える
のだ。もちろん、絶対に昏倒なんかしない。
それは自分でもわかっているけど、いったん
発作が起こると、不安が意識の全領域を占拠
して、気持ちにまったく余裕がなくなってく
る。わけもなく、抑えようもなく、やたらに
胸騒ぎがするのだ。

この因果な病（↑というのもおこがましい
が）とは二十年近い付き合いだから、原因も
対処法もだいたいわかっている。睡眠もしく
はアルコールが足りていれば、百パーセント
発作が起こる気づかいはない（↑考えてみる
と情けない）。出版社から増刷の知らせが来た
日は、ほとんどだいたいようぶ（↑なんともい
じましい）。発作が起こったなら、深呼吸とポ
ジティブ・シンキングで十数分間をしのぎき
る。まあ、最長で二十分ですね。

起こる場所は、閉所か高所。まだ駆け出し
の病人（↑違うってば）だったころは、電車
に乗るのがほんとうに怖くて、遠くへ行くの
にも、各駅停車でひと駅ずつ移動したりして
いたものだ。

歳を取るにしたがって、症状はマイルドに
なり、しのぎかたもルーチン化して、ひよっ
としたらあと何年かで完治してしまうかもし
れない。そうあってほしい。しだいに少なく
なる人生の残り時間のうちの、週に数十分の
貴重な読書タイムを、いつまでもこんなこと
でつぶしちゃいられませんもの。

ところが、最近じゃ、必死のポジティブ・
シンキングをおちよくなるように、諦念めいた
ネガティブな思いが、ずずんと湧いてくるん
です。懸命に持ちこたえようとするそばから、
持ちこたえてどうする、ってささやきが聞こ
えるのね。

ここで倒れてたまるか、という気持ちだが、
だんだん希薄になってきている。いっそ倒れ
てしまったほうが楽だ、と、いつも心のどこ
かで思っている。

酸素が足りない。休息が足りない。
そういう状態で、冒頭の電光ニュースなど
見たら、わたし、あっちの世界へ飛んでつて
しまったかもしれません。

要するに、働きすぎだよねえ。それはもう

重々承知しているし、自分としても、緩慢な
自殺を図るつもりなど毛頭ないのだが、今度
こそ絶対に休むぞと大決心するたびに、必ず
「あと〇冊終わったら」という現実的な留保が
ついてしまう。

で、〇冊が終わるころには、べつの△冊の
締切りが迫っていて、そこで少しでも休ん
だらと、エンジンをかけ直すのがたいへん
だから、切れ目なしで働くことになる。毎度
毎度、そのくり返し。

たったひとつの救いは、好きな仕事をやっ
ているということ、その点はほんとにあり
がたいと思っているけれど、それにしても、
もうちょっと余裕が……と書いてしまうと、
またまた翻訳書の部数右肩下がり傾向のほう
へ話が落ちていきますね。

ぼやいてもしかたがないが、結局は、本が
売れないからたくさん訳すしかなくて、仕事
が遅いから休みを削るしかない、というよう
なわけで、神経症の訳者の酸欠状態は、まだ
まだ続きそうな形勢である。

この冬のあとに、果たして春は来るのでし
ょうか。その春まで、わたしは生き延びられ
るのでしょうか。

この生活の延長上に八十歳のわたしという
ものを思い描いてみると、一種さわやかな感
動が……うん、湧き起こらないなあ。